

信濃川補修工事竣工記念碑

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Esuchi

信 濃川治水紀功碑の横から、大河津分水の堤防にのぼると、昭和六年に竣工した可動堰がみえた。大正十三年に完成した大河津分水は、その三年後に分水路への流量をコントロールする自在堰が崩壊して、信濃川の水はすべて分水路へと流れこんだ。この結果、下流域は用水に事欠き、河川舟運も途絶した。一刻も早く堰を復旧しなければならぬ。内務省の威信をかけた補修工事は、今も高潔な土木技術者として讃えられる青山士にゆだねられた。

こうして崩壊した自在堰の代わりに完成したストリーニ式可動堰は、八〇年の役目を終えて解体が始まっており、大河津分水の守りはラジアルゲートの新可動堰が固めていた。ああ、間に合ったな。やはり一度は見えておきたかった旧可動堰は、まだその姿をとどめていた。

堤防の上を解体中の旧可動堰のほうへ歩いていくと、ちょうど真横の堤防下に信濃川補修工事竣工記念碑があった。かの有名な青山士のエスペラントの碑だ。キリスト教の敬虔な信仰に基づく青山の碑文は、和文とともに国際言語エスペラントで「萬象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ」「人類ノ為メ國ノ為メ」という言葉が刻まれており、ここを訪れた人々に深い感銘を与えている。

若き日の青山に大きな影響を与えたのは、キリスト教思想家の内村鑑三だった。内村は言う。世の中を少しでも良くするためには、まずは金を残すべきだ。財を成して清きことに用いるのだ。それが出来ぬものは事業を残すべきである。なかでも土木事業は、永遠の喜びと富とを後世に遺すものである。

こうした内村の考えを率直に受けとめたのか、青山は土木の道を志し、荒川放水路や大河津分水の建設など生命と財産を守る仕事に生涯を捧げた。

青山の碑は、建設関連の中では日本で最も有名なもので、私も写真で何度か見てきたが、意外なほどでかい。せいぜい人の背丈の倍ぐらいだろうと思っていたが、台石を含めれば四倍はありそうに見える。以前、やはり青山が建てた荒川放水路完成記念碑を見たが、目立たないものだったし、自分の名前さえ刻んでおらず、控えめな人物という先入観をもっていただけから、この大きさには驚かされた。治水紀功碑がモノリスなら、旧可動堰の橋脚を模したという奇妙な形は、ごついロケットというべきか。今にも動き出しそうに見えた。

その夜、宿で寝転びながら、内村の説教の続きを思い起こしてみた。事業も残せないものは、思想を残すべきである。それできないものは、勇ましい

高尚な生涯を送ればよい、だったろうか。私は金もないし、土木技術者でも思想家でもない。最後の砦の勇ましい高尚な生涯もどうやら自信がない。ならば、せめて他人様に迷惑をかけないように心がけ、出来るだけ幸せに生きてみようか。「人類ノ為メ國ノ為メ」とはいかないまでも、小さな家庭の為ならば、五〇キロ近い距離を自転車で行き来した同行者は、疲れ果てて、ホゲホゲと寝息をたてていた。



信濃川補修工事竣工記念碑

[交通]信濃川治水紀功碑から徒歩2、3分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。